







明へ利5  
2846  
3止

年申日之發句

正月大



元加きまの萬歳をんてうらひひ

長頭丸彩毫を地りて

元日にましまし

けりり。又乃日終る

まらうて。きれう終る

とひひ

とまらうて。きれう終る

三日 五更成りて子屠癩を

とまらうて

酒をとりてらふまけは春

如音  
玉泉文庫  
季吟机





祇園にちかぢきあひ  
乃社

初学せし上ましむく如き事  
あつらひしふゆく破魔夫ら

寺

木子けく若葉まらぬ  
きりやえりれはこよひ  
よりあすかきそく七句  
志強し。ぬごりりり

けきた

雨野 相生すまの又きやん  
ふれくくもや神にまひり葉  
かゝりれそや唐おんぶれ  
いひあひあつて葉にあひあひ

七

一對にあなすまきりあま  
かまけの雲はむもや野原指の  
是も清きやまやんそえ

白きれせら

それうら乃白きやせれあ

山がくわいしと月川をき

十

子乃日ありけ

やうひく小松乃根をひきぬ

いれれ子乃乃やのころ松

やあやぬんこあや

あつらひにちりり

に琴をかまひ



さしやいふくはし  
りせーうた

十言 五乃中よまぬとれぬのひが  
ひらぬの書筆乃ち梅むら

十言 ちりく小短入あまこ  
とこせーいこせー

十言 ちりく小短入あまこ  
とこせーいこせー

十言 ちりく小短入あまこ  
とこせーいこせー

仙洞の書巻を比下  
くもんせさやたまひ

けし

小西乃ささひんち梅  
新の作トもさあれを合  
や高きれぬ黄金れれ  
比職をもさやとあな  
かろ根ハ遊乃ちた

影を山う石

瑞さやそぬきすまが  
そにたえぬけおる月乃自  
向あれそやまれさ  
あささそなほさやひの



花崗の石のうらむるも  
根の冬とてちん枯れ  
雪のふりて女も是れ  
あゝ十四のうらむる  
うらむる

十のうらむるも

喜 大道のうらむる

うらむる

うらむる

踏歌の節

うらむる

うらむる

喜 厄神のうらむる

うらむる

うらむる

うらむる

うらむる

うらむる

うらむる

うらむる

うらむる

うらむる

うらむる

うらむる



岩柳ゆきや風うちうらや  
所なき木にそよ風や赤柳  
空手に雪入るあらしの  
うらやまはるやせに薫る香  
うらやまはるや  
あまのこころに涙を流す  
春よりこころをさす  
らにまはるる花の  
小室より柳のこころ  
けしき  
うらやま柳のこころ  
あまのこころをさす  
こころのや伽羅の焼く梅の花

二月小

朔日

若所入堂よりあまの

うらやまはるやせに薫る香  
うらやまはるや  
柳のこころをさす  
空手に雪入るあらしの  
けしき  
うらやまはるや  
あまのこころに涙を流す  
春よりこころをさす  
らにまはるる花の  
小室より柳のこころ  
けしき  
うらやま柳のこころ  
あまのこころをさす  
こころのや伽羅の焼く梅の花



十日梅乃ちもさかすの道敷真白し  
本舞はらうかろりぬ  
あつたれぬしうあや  
人乃ちうかろりけ  
よ二つうひさうし  
きううれ  
落梅乃ちもさかすやてあひ  
ふ梅と連理のふたれ  
枝もゆくとりされ  
し人乃ちう  
詩乃れも切炭のちう  
花さすうさうさう  
喜ぶれとさうさう

くちかろりされひ  
こさう  
子さう  
ははは  
あひあひ  
人乃ちう  
梅さう  
子さう  
池田正式私れり  
小さう  
上京さう



大和にゆきんといひ  
とくおとこいひのき  
せきこぞあやうきあはれ  
あまのつらさうきあまの  
後乃る世よりえりて  
つらさうきあはれ  
大和とていひて  
あはれ  
あつちやうけき  
古より梅の木は  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ

正音

とくおとこいひのき  
あつちやうけき  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
三月大  
あつちやうけき  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
あはれ  
三月  
三句



桃乃海のつらきをわらふ  
うらのむらさきし形は桃の酒  
をばけしやまのこいし  
四日 海堂の葉と清き水とや除老  
人乃とくたこふ  
らふか  
を乃威  
そよよとわらふがたれ  
をばけしやまのこいし  
花よりそよよとわらふがたれ  
入  
りしははたふ人  
はたふはたふはたふ  
はたふはたふはたふ

をけりしはたふはたふ  
ぬほぬほと草乃飛  
あけられふ遠く東山  
乃かたふあそびたれ  
をばけしやまのこいし  
をばけしやまのこいし  
ゆきしはたふはたふ  
はたふはたふはたふ  
はたふはたふはたふ  
乃ゆきしはたふはたふ  
あそびしはたふはたふ  
はたふはたふはたふ  
一僕とありしはたふはたふ



新黒谷千一木乃  
撰成あり條に經冊  
新多々ありしうし人の詩  
とありしことありけ  
そむせりや親白りいひのものを  
去國のふたれこをり  
社殿すしん入ぬとす  
花ありれきふりち入ぬ  
こそをわたりしれり  
えんつりけちりし  
をいれしきふりてやとるん  
かこりふりけりし  
もやいれ山登り

あしちしきし海のむ  
おこかたきしきにし  
とまきらぬ世きり形  
酔をこひしりすも  
あしんやきりて何ち  
わが腰よつりけりし  
らんひつしきしきり  
ありえりしきりし  
りしりしきりしきり  
とたりし

兼好とありしきりし  
山のけりしきりし  
蜀にれ錦もはあり



桜ハ白母にありし  
香煙峯乃雲ととら  
おどろくべし加賀景  
有りとれし時  
子りとる果つるに  
うかたれまほし  
岩をうもつる一樹  
乃冷れ跡とがわ  
いひぬるまほし  
るやびまほし  
ゆりゆき先づく  
ゆりゆきまほし  
ゆりゆきまほし

硯箱中もれお乃  
ゆりゆきわいれ  
いりゆきまほし  
あゆむまほし  
せうりゆきまほし  
かゆりゆきまほし  
ゆりゆきまほし  
ゆりゆきまほし  
ゆりゆきまほし  
ゆりゆきまほし  
ゆりゆきまほし  
ゆりゆきまほし



たあし鼻はあてたきわ(あ)  
知るといふも——  
しそふれしはしふ  
かきこゆしふし  
と——とあふあし  
まあしむしあふ  
しん程又人のあま  
医へふれしはし  
うらふしつてあふ  
はしそあふ程林寺小  
見かふしつてあふ  
本さたつてあふ  
まふしつてあふ

素子に系ぶるあふ  
やう屋のあふ海人  
ふれしはしあふ  
しそあふし  
えんしあふし  
南程ふしはし  
あふしあふし  
せしあふし  
しそあふし  
り(あふ)し  
あふしあふし  
あふしあふし  
あふしあふし







世のあはれ者なりと云ふ  
やうな心持なりと云ふ  
なる色なりと云ふの下  
凡の心なりと云ふ  
あはれと云ふやま  
これよりいへば未だの  
柳腰たるとやかり  
あはれなりと云ふ  
の揚そこれ様とけを  
さへくといふなり  
いふあはれ人なりと云ふ  
不さうなりと云ふ  
さうなりと云ふ

さうなりと云ふ  
さうなりと云ふ  
と乃十人なりと云ふ  
げなりと云ふ  
又よれなりと云ふ  
あはれなりと云ふ  
らなりと云ふ  
これなりと云ふ  
乃いなりと云ふ  
法師なりと云ふ  
と云ふなりと云ふ  
——  
さうなりと云ふ



あまのいづるつらきあまの  
りかこやぐちらるるれい  
わごとくまらぬあまの  
るけりしらるる人  
まらぬあまの  
花と此のうらみあまの  
智恩院  
ふもれもやんぬあまの  
まらぬあまの  
のあまのあまのあまの  
りしあまの  
あまのあまのあまのあまの  
長あまのあまのあまの

あまのいづるつらきあまの  
りかこやぐちらるるれい  
わごとくまらぬあまの  
るけりしらるる人  
まらぬあまの  
花と此のうらみあまの  
智恩院  
ふもれもやんぬあまの  
まらぬあまの  
のあまのあまのあまの  
りしあまの  
あまのあまのあまのあまの  
長あまのあまのあまの







まうりやれまうりまうり  
りまうり

ひねるを毛と微笑一枝ふ

日とやうく言わたり

てくれおるるのひま

まうりや花はかよて

まうりまうりまうり

とあつて雲山うと

のあつて

まうりまうりまうり

と首まこえり

こまうり又か

ぬいやうり塔うり

とまうりの指れこふ

たうりまうり柳

涙まうりこまも

涙うけあまの花

梅檀棠射まうり

まうりまうり

まうりまうり都

まうりまうり

乃下つこと

まうりまうり

まうりまうり

まうりまうり

まうりまうり



ふちびと

不<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ身<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
玉<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
ら<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
き<sup>レ</sup>相<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
あ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
む<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
あ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
花<sup>レ</sup>を<sup>レ</sup>む<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
ら<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
老<sup>レ</sup>稚<sup>レ</sup>男<sup>レ</sup>女<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
ゆ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
あ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず

か<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
九<sup>レ</sup>乃<sup>レ</sup>金<sup>レ</sup>念<sup>レ</sup>あ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
十<sup>レ</sup>日<sup>レ</sup>や<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
ゆ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず

む<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
梅<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>花<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
お<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
ら<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
と<sup>レ</sup>も<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
ゆ<sup>レ</sup>き<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず  
あ<sup>レ</sup>ひ<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ぬ<sup>レ</sup>は<sup>レ</sup>な<sup>レ</sup>ら<sup>レ</sup>ず



後かきせしと多し  
こころ

中よみ乃花の愛もあつて  
うらやまも花を羨みあつて  
清く入るは

あけや花の愛もあつて  
そよぶうらやまもあつて  
よれかりかゝるは  
ゆゑに後かきし

ゆゑに後かきし  
あつては花の愛もあつて  
そよぶうらやまもあつて  
よれかりかゝるは  
ゆゑに後かきし

春乃もあつてか  
いかにあつて  
あつては花の愛もあつて  
そよぶうらやまもあつて  
よれかりかゝるは  
ゆゑに後かきし

余新あつて  
あつては花の愛もあつて  
そよぶうらやまもあつて  
よれかりかゝるは  
ゆゑに後かきし

あつては花の愛もあつて  
そよぶうらやまもあつて  
よれかりかゝるは  
ゆゑに後かきし



まろりて回上人乃侍  
勢日急乃跡紀を  
坊りなるあどるあり  
由りされたる系り  
あく更よつり  
かりしそらりし  
人の地をせし  
あはれと目たさるる  
はく日急言乃例  
くさか  
あはれ  
そあはれ  
昔 庭よりしるつくは

あはれ  
はく日急言乃例  
くさか  
あはれ  
そあはれ  
昔 庭よりしるつくは  
あはれ  
はく日急言乃例  
くさか  
あはれ  
そあはれ  
昔 庭よりしるつくは  
あはれ  
はく日急言乃例  
くさか  
あはれ  
そあはれ  
昔 庭よりしるつくは







青 三カぞうに鬼子母神

かきくさくさくさくさく

くさくさくさくさくさく

さくさくさくさくさく

さくさくさくさくさく

さくさくさくさくさく

小気色さくさくさく

袴さくさくさくさく

ふた節さくさくさく

さくさくさくさくさく

さくさくさくさくさく

さく色や鈴鈴さくさく

東山さくさくさく

さくさくさくさく

さくさくさくさく

さくさくさくさく

さくさくさくさく

さくさくさくさく

花さくさくさくさく

竹さくさくさくさく

さくさくさくさく

さくさくさくさく

白さくさくさくさく

後海さくさくさく

人さくさくさくさく

ふさやがれさくさく







Handwritten text in a cursive script, likely a religious or philosophical passage. The text is written in a fluid, connected style.

Handwritten text in a cursive script, continuing the passage from the previous page. The characters are highly stylized and interconnected.

Handwritten text in a cursive script, concluding the passage on this page. The writing remains consistent in style and flow.

Handwritten text in a cursive script, likely a religious or philosophical passage. The text is written in a fluid, connected style.







あかふえと海ととれた鮎の魚  
色所ははちやうと野や花を著  
本はうらにわらうと世に絶母の  
海の北のあやういふとふり  
あつととあふあふれや大嵐の皮

七日 祇園会ふれ

人の世はくちかやういふとあつ  
もはちやうとあつとあつとあつ  
ゆふゆふとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ

八日 江島志於入るるを

あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ

九日 祇園のゆれ

あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ

十日 夜をふりてあつとあつとあつ

あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ  
あつとあつとあつとあつとあつ



石竹をうへつりけらに  
花乃多し〜

吾色も天なきのひ石竹

これ花をみんもせし石の竹

石の竹をてしれお神でまじ

嶺乃のわ〜

かんひの涙き〜

ち〜

〜

神〜

昔  
The Summer Song

竹のうへつりけら墓

よま〜

あ〜

〜

〜

蝶も事〜

ゆ〜

〜

昔

人乃三回〜

あ〜

〜

〜















おしやうふ 池邊の海を渡る  
おしやうと

百はのたてがらんすすめれ  
おふのぬねたせきるのち  
池のちのちりー

かゝれはゆきれ  
六角にいふれをかめはあし  
秋の雪いふしん今春らん  
山登りあふりゆきふい  
世 ちしこも乃池邊より  
うれりけり

ちしこも乃池邊より  
うれりけり  
ういかに松む乃色い太夫か

根をやりてむも木嵐さる雲嵐  
人乃まふあうり風終れ  
ゆきえりれ

世 踏雪意又乃追音り

ふり真りしゆー  
以い立春くまむさく  
らあやふのひもあから春  
予ゆと各句す入

ゆきくー身三花

ひと花やひもゆきあはれ

中五六麻

ゆきゆきくーゆきゆき







己身乃時々男を  
地とせぬやあし  
と久し乃あえ  
く之を祝祭志し  
かより日切乃月  
むしき登つて  
作

朔日 月乃時々乃出ぬ  
二日 月乃時々乃出ぬ  
三日 月乃時々乃出ぬ  
四日 月乃時々乃出ぬ  
五日 月乃時々乃出ぬ  
六日 月乃時々乃出ぬ

七日 月乃時々乃出ぬ  
八日 月乃時々乃出ぬ  
九日 月乃時々乃出ぬ  
十日 月乃時々乃出ぬ  
十一日 月乃時々乃出ぬ  
十二日 月乃時々乃出ぬ  
十三日 月乃時々乃出ぬ  
十四日 月乃時々乃出ぬ  
十五日 月乃時々乃出ぬ  
作

三五夜の月を  
人共に見る  
出りしを







廿日入定り月と云れり云々の海  
廿二十二夜も月ハ三十二相あり  
廿五をわつし月ハ三十二相あり  
廿六日ありし夜も月ハ三十二相あり  
廿七夜も月ハ三十二相あり  
廿八夜も月ハ三十二相あり  
廿九夜も月ハ三十二相あり  
三十夜も月ハ三十二相あり  
三十一夜も月ハ三十二相あり  
三十二夜も月ハ三十二相あり  
三十三夜も月ハ三十二相あり  
三十四夜も月ハ三十二相あり  
三十五夜も月ハ三十二相あり  
三十六夜も月ハ三十二相あり  
三十七夜も月ハ三十二相あり  
三十八夜も月ハ三十二相あり  
三十九夜も月ハ三十二相あり  
四十夜も月ハ三十二相あり  
四十一夜も月ハ三十二相あり  
四十二夜も月ハ三十二相あり  
四十三夜も月ハ三十二相あり  
四十四夜も月ハ三十二相あり  
四十五夜も月ハ三十二相あり  
四十六夜も月ハ三十二相あり  
四十七夜も月ハ三十二相あり  
四十八夜も月ハ三十二相あり  
四十九夜も月ハ三十二相あり  
五十夜も月ハ三十二相あり

二念ありし夜も月ハ三十二相あり

追加悔日乃月

廿二夜も月ハ三十二相あり

九月大

廿二夜も月ハ三十二相あり

廿二夜も月ハ三十二相あり  
廿三夜も月ハ三十二相あり  
廿四夜も月ハ三十二相あり  
廿五夜も月ハ三十二相あり  
廿六夜も月ハ三十二相あり  
廿七夜も月ハ三十二相あり  
廿八夜も月ハ三十二相あり  
廿九夜も月ハ三十二相あり  
三十夜も月ハ三十二相あり  
三十一夜も月ハ三十二相あり  
三十二夜も月ハ三十二相あり  
三十三夜も月ハ三十二相あり  
三十四夜も月ハ三十二相あり  
三十五夜も月ハ三十二相あり  
三十六夜も月ハ三十二相あり  
三十七夜も月ハ三十二相あり  
三十八夜も月ハ三十二相あり  
三十九夜も月ハ三十二相あり  
四十夜も月ハ三十二相あり  
四十一夜も月ハ三十二相あり  
四十二夜も月ハ三十二相あり  
四十三夜も月ハ三十二相あり  
四十四夜も月ハ三十二相あり  
四十五夜も月ハ三十二相あり  
四十六夜も月ハ三十二相あり  
四十七夜も月ハ三十二相あり  
四十八夜も月ハ三十二相あり  
四十九夜も月ハ三十二相あり  
五十夜も月ハ三十二相あり



九 平陽の道あり

道は仙人の道なり  
北くはやちの道あり  
曲るのふれり  
道はすく  
早くは  
神を  
春福なり  
とや  
十日  
南る  
月教

十日 平陽の道あり

道は仙人の道なり  
北くはやちの道あり  
曲るのふれり  
道はすく  
早くは  
神を  
春福なり  
とや  
十日  
南る  
月教



月夜書

夕暮やいづれか人の心は  
月夜書

若くはあつてもうか  
かきかめ若くはあつても  
ともた十三句

五

聖蹟後乃 ありし  
乃んえ侍る

あつてもうか  
ゆ後又うきほあつた  
いふ乃乃乃乃乃  
しるくゆかへ侍る  
るしきしあつて

雑考

系行よまひりし鉦鼓九月

山幸

二度の色これならん  
ゆきんのかきかめ  
娘山にりつよき  
うしろあつても  
あつてもうか  
柿のれ木のかきかめ  
ゆきんのかきかめ  
へんしきいふあつても  
染しるもあつても



羽言人のそめたるおもあふ  
あはれとてりなまあぢあぢを  
本乃も如捨ひしれを神とて  
ひえ乃乃方法と云ふや  
てりし時

神多とまあしあまう八ま子  
いしとさうあむしあ  
あはれしとてりし

あはれしとてりし

あはれしとてりし

十月大

あはれしとてりし

あはれしとてりし

あはれしとてりし

あはれしとてりし

あはれしとてりし

あはれしとてりし

あはれしとてりし

あはれしとてりし

あはれしとてりし

あはれしとてりし

あはれしとてりし







冬ふかきかゝるふき強乃ふくさる  
雪ははるなみ本もさう中をにを  
本園あゝお招きしはなまのま  
かりこゝろはなれぬや白や  
さしはなれぬあはれのまのま

十二月小

期

あゝかゝるふき強乃ふくさる

あゝかゝるふき強乃ふくさる

返上

あゝかゝるふき強乃ふくさる

三

あゝかゝるふき強乃ふくさる

冬ふかきかゝるふき強乃ふくさる  
雪ははるなみ本もさう中をにを  
本園あゝお招きしはなまのま  
かりこゝろはなれぬや白や  
さしはなれぬあはれのまのま

八

あゝかゝるふき強乃ふくさる  
雪ははるなみ本もさう中をにを  
本園あゝお招きしはなまのま  
かりこゝろはなれぬや白や  
さしはなれぬあはれのまのま



ふけい卓ろく一龍と  
しりきふんれんあり

孔子老子釈迦もやうなませんを

新しきもの存せよ

てんり

まじりぬを氷とらり此壁

まじりぬを氷とらり此壁

はまじりぬを氷とらり此壁

まじりぬを氷とらり此壁

まじりぬを氷とらり此壁

まじりぬを氷とらり此壁

まじりぬを氷とらり此壁

園書はあきまきあきまきあきまき  
まじりぬを氷とらり此壁  
まじりぬを氷とらり此壁  
まじりぬを氷とらり此壁  
まじりぬを氷とらり此壁  
まじりぬを氷とらり此壁  
まじりぬを氷とらり此壁  
まじりぬを氷とらり此壁  
まじりぬを氷とらり此壁  
まじりぬを氷とらり此壁

常命

まじりぬを氷とらり此壁

まじりぬを氷とらり此壁

苦

まじりぬを氷とらり此壁

まじりぬを氷とらり此壁

まじりぬを氷とらり此壁

まじりぬを氷とらり此壁



花とくま

まじらふはむしとてふ草場  
おまやまは経路とてふ色紙  
昔のえゆらまはたててふ  
なつたれは火焼く

ゆ火焼くむらじゆ海の家  
おらぶももをえたる山の井  
十二月大

とまふれぬ  
すまふれぬ  
小ぶるは海の家  
賢人がかんとてふあはれ海  
硯乃ふいてぬ

海とくま

いそ海とくま  
長頸丸の巻物  
かまふとてふ山形舟子  
ある余をて

十二月れとてふ  
四日に  
四角子とてふ  
乃日布中白とてふ  
とてふあはれ

かまふとてふ  
いそ海とくま



丹月乃如也律志のよは光  
雲にほれをていふ本城あり  
まら風草子よりおや竹の香  
ちやうとふ山とてまねらうれ  
踏雪ととくまの草  
乃句とていひゆし  
おれゆの道やうたれぬま  
あうつしきうらひいれ  
ま  
とらふまをされしはれら  
とありかむるなりまの  
るる路にさうさ  
まらまのあま

出りりれをかへ  
にいひま  
雲をを風入りまき能澄  
まらぬまのまらぬまの中  
まのまらぬまのまらぬま  
まらぬまのまらぬま  
まらぬまのまらぬま  
まらぬまのまらぬま  
まらぬまのまらぬま  
まらぬまのまらぬま  
まらぬまのまらぬま  
まらぬまのまらぬま







やうな一筆のうし  
きまきしものも同  
歩ゆらんぬめり  
うつし孫あり  
十部し年瑞路  
むかひり  
出立るぬ又日の白  
きりしやぬるも  
身し命りぬも  
はるるはるる  
はるるはるる  
あはるるはるる

廿日きしぬの  
かきしぬの  
定言しぬの  
志るるはるる  
きしぬの  
かきしぬの  
らしぬの  
あはるるはるる  
ふれぬの  
きしぬの  
あはるるはるる  
はるるはるる



をゆえんは乃へまこと  
か〜と〜  
又は野目あんい  
おこぐあ〜おつれ  
そ文公器〜  
あ〜  
い〜  
は〜  
い〜  
乃本〜  
んせと器〜  
宮の〜  
せ〜

かぢぢよ又誰  
せれ〜  
と伺ひま〜  
り〜  
か〜  
あ〜  
張〜  
さ〜  
ま〜  
あ〜  
ま〜  
〜  
〜  
〜



ぬれぬる ぬるる  
いふに彼教十人  
ふをかくらつて  
くくく かくかく  
ぬ又またぬる  
かふは  
人のかたに  
いふに  
おのの  
まう  
井

移り暮る  
つれづれ  
か  
く  
か  
か

慶安元戌曆

南呂十日

重開板





Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in dark ink and is arranged in several lines. The page is aged and shows some discoloration and wear, particularly at the bottom edge. The text is mostly illegible due to fading and the cursive style.



Handwritten text in a cursive script, possibly Arabic or Persian, on the left page. The text is arranged in several lines and includes a circular stamp or seal on the left side. The paper is aged and shows signs of wear, with some damage at the top edge.





